



男は 痛い



國友万裕

第45回

『窓辺にて』

1. 教え子との楽しい時間

10月、突然、かつての教え子と会うことになった。彼は今年の春卒業した子なのだが、俺が彼を教えていたのは1年生の頃だ。したがって、相当間があいているのだが、その彼からメッセージが来て、仕事で京都に行くから先生と会いたいというのだ。彼は体育系の爽やかなスポーツマンで、今は就職して社会人だ。教え子から、慕ってもらえるのは嬉しいけれど、「ひょっとして・・・」という一抹の不安が頭をよぎった。

もうだいぶ前だが、かつての教え子からメッセージが来て、借金の相談をされたことがあるのだ。その子は、学生の頃は決して俺を慕っていたわけではなく、卒業後もSNSで繋がっていただけで、やりとりはなかった。その彼から突然メッセージ。何かと思ったら、就職した後、複数の留学生の借金の保証人になってしまい、ところがその留学生たちからトンヅラされてしまって、どうしようもなく、藁をも縋る思いで、俺に連絡してきたみたいだった。全部で400万円くらいのお金を支払うことになるらしい。

もちろん、相手を捕まえて、お金を取り戻すことはできるのだが、裁判までの費用は彼がもつことになるし、当座のお金も立て替えなくてはならない。真っ青、真っ暗。その気持ちはわかるのだが、俺に言われたってどうすることもできない。励ますよりほかなかった。若いから今借金を背負ってもまだまだ立ち直れるだろう。気の毒だけど、そういうしかないのである。彼とはそれ以来連絡は取り合っていない。その後うまく行ったのだろうか？

その子だけではない。ある日突然、ある学生からメッセージが来て、何かと思っていたら、仕事でアンケートを取らざるを得なくなってしまったみたいで、それで誰かいないかとなって、俺に頼ってきたのだった。「なーんだ、そんなことか。俺のことが好きで連絡してきたのかと思ったのに

(笑)」と思った。

今度の教え子もひょっとしてなんかのセールスをしようと呼んだのではないかと一抹の不安がよぎった。しかも対面でとなったら、深刻に借金への援助を求めて来られるかもしれない。不安な気持ちがよぎって、その子に「そういうんじゃないよね？」とメッセージしたところ、「それは全然ないです(笑)」という返事だった。

彼が俺のことを本気で慕ってくれていることは、会った瞬間にわかった。赤い車で俺を迎えにきたのだが、その時の笑顔を見ただけで、そういう気はないのだなあということは読める笑顔だった。

しかし、ちょっと見ないうちに大人になったものと思った。彼とはまずは銭湯にいった。船岡温泉に行く予定だったのだが、たまたま行ってみると臨時休業中で開いてなくて、近くの他の銭湯に行った。そこは大して有名などころではないのだが、昭和レトロで、なかなかの風情がある。行ってよかったと思ったものだ。ここでまた一つ京都を開拓である。

彼の車で京都を走っていると、見かけたこともないような京都の風景と遭遇する。40年も京都で暮らし、さまざまな京都散策をしてきた俺が見ても、初めてみるような風景。そして、そこに風情があるのだった。

体育系のやつがいいのは、風呂なんかでも気楽に付き合ってくれるところだ。体育系でない子の場合は先生とお風呂にいることには抵抗がある。いくら親しい先生でも、あまり積極的に入ろうとはしてくれない。しかし、体育会の子の場合は、他の男性と風呂に入るくらいは慣れているせいか、何の抵抗も感じていない。抵抗があるなんて、「そんなこと考えたこともない」というのだ。

風呂に入った後、今度はキッチンパパに行った。ここは有名な洋食屋で、お米屋さんの奥に洋食店があるのだ。これもまた昭和レトロで人気のあるお店である。食ベログの1位になっていて、前から行きたいと思っていたところだった。俺はハンバーグとカキフライ、彼はビーフシチューを食べて、

お勘定は俺が払ってあげた。

あー、楽しい1日だった。

2. ニューエラを買う！

俺は本当に体育系の学生たちとはうまく行っている。卒業後も連絡をしてくれるし、会ってくれる。実はこの夏休みにもかつて野球部だった教え子3人と焼肉に行った。彼らは2年ほど前に卒業していて、今や3人とも大阪でサラリーマンである。大阪の難波の焼肉屋で会うことになった。

その焼肉屋は他にもたくさん店舗があるお店で、他の大学のバンド系の男の子から紹介してもらった店だ。安いので、奢りやすい。そう思って、難波に出かけた。俺はいつだって時間よりも早くに着くので、その日も余裕を持って1時間くらい早くに着く予定だった。

ところが、難波に着いた後、スマホのマップで必死になって店を探すのだが見つからないのだ。焦った。よくよくスマホで調べると、間違った店舗の方に俺は歩いていた。難波なんて滅多にいかない。大阪には以前は毎日のように言っていたが、大概是梅田界限である。難波で降りたことは数えるほどにしかないのだ。

仕方がないので、学生に電話し、店の場所を確認して、タクシーで店に向かった。店に着いた時には3人とも揃っていた。1人は元々は生まれ故郷で就職していたのが、大阪に転勤してきたばかりだった。1人は付き合っている彼女と婚約中。もうすぐ結婚である。そしてもう1人は最近ボディビルをやっているらしくて、毎日のようにインスタに自分の体をアップしている。

3人ともいい子で、息子ぐらいの歳だ。俺に息子がいたらこんなふうになるのかなあとか思いつつ、1時間半ほど、食べて、飲んだ。もちろん俺の奢りだが、俺は彼らにつきあってもらっているわけだから、それくらいの失費は仕方がない。4人で2万円くらいだったからやはり安いお店だ。

野球部の子たちと話していて、気づいたことは

ニューエラの帽子をかぶっていることだった。前号にも書いたが、実は他にも野球部の子で繋がっている子がいて、彼はこの3人が入学するのと入れ替わりで卒業しているの、4つほど年上で既婚なのだが、彼が「ニューエラを買え」と言っていたのだった。

俺は頭が大きいことがコンプレックスで、どっちみち合うサイズなんてないだろうとラインすると、「いや、大きいのもありますよ」と言われた。

以前はニューエラの店は新京極にあったらしいのだが、今はなくなってしまって、帽子屋さんの一角にニューエラのコーナーがある程度だ。何軒か店を回って、新京極にある店でついにかい入るニューエラの帽子を見つけた。そして、その足で、その野球部の子の友達で、同じく元野球部の子がやっているカフェに行った。

俺が帽子のシールをはがそうとすると、「先生、剥がしちゃダメですよ」と彼らから言われた。今はサイズなどの書かれたシールをつけたままにしておくのが、流行りだそう。時代の流れに俺はついて行っていない。やはり、おじいさんなのである。

3. 弟の下宿

実家の弟は50歳である。俺が小学校3年生の時に生まれたので歳が離れている。弟は東京の大学を出た後、九州の実家に戻って、それ以来母と暮らしている。その弟が、最近になって下宿することを考えているというのだ。

弟は親孝行で、家族思いで、年取った母を蔑ろにするような弟じゃない。でも、母は84歳で、健康とは言っても高齢である。なぜ今頃になって???と思ったものだった。もちろん、そんな遠くに下宿するわけでもないから、何かあった時はすぐにかけることができる。

弟を見ていると責任を感じてしまうのだ。俺のような兄を持ったがために弟は相当迷惑だったはずだ。でも、そのことで弟は俺のことを責めたこ

とは1度もない。弟は子供の頃から、現実的で、堅実で地に足のついた子だったため、子供の頃は成績は大してよくなかったのに、着々と勉強して東京の大学に行った。

弟の頃は子供の数が多かった頃で、受験生が多かったため、大学に入るのが一番難しい時期だった。そして卒業する頃になると就職難の時期と重なり、最初は東京で就職するつもりだったのが地元に戻るしかなくなってしまった。なんとなく運が悪い子なのだった。

だから弟にだけは幸せになってもらいたい。それは切なる願いだった。

弟は婚活がずっとうまく行かなくて、50歳で独身だが、ひょっとして誰かできたのだろうか。これまで真面目に堅実に生きてきた弟は、少しは生活を変えたいと思って、下宿生活に踏み切る決心をしたのだろう。ここ数年、あちこちの啓発セミナーにも通っていて交友関係は広がっているみたいなので、そこで刺激を受けたのかもしれない。

しかし、問題なのは母である。母はまだ元気だし、気丈な人なので、84歳とは言っても、まだ元気である。つい最近まで車の運転もしていた。死ぬ時も周りに迷惑をかけない死に方をしたいと思っている人だ。だけど、今頃になって突然ひとりになって大丈夫なのだろうか。この頃は電話代は安いし、母には友達もたくさんいるから、心配はないと思うのだけど……。

行きつけの飲食店の女性に話すと、「まだ頭がしっかりなさっているんだったら大丈夫よ」とのことだった。彼女はすでにお母さんを亡くしているのだが、死ぬ間際は彼女が故郷からお母さんを引き取っていた。

「だけど、老人の場合だと朝まで元気でいても、ころっと夕方になくなったりするから、心配なんだよねー」

「それを言っていたら、あなただって、私だって、明日ポックリ死ぬ可能性はあるわけだから笑。あなたは心配性だから。そこまで考えなくてもうま

くいくわよ」と言われた。

4. 女みたいだと言われること

そういう話をした数日後、その母と久しぶりに電話で喧嘩してしまった。俺は時々、昔のトラウマが湧いてきて、母にはそのときのことをこぼしてしまう。すると母からは、「そんなふうに愚痴愚痴いうのは女のすることなんだから。およしなさい」と言われた。

俺は電話口で母を大声で怒鳴りつけた。いったい何回言えばわかるんだ！女みたいに愚痴愚痴言うなどと言われることが俺が一番嫌な台詞なのである。

今振り返ったときに、俺の人生の原点は、「女みたいなやつ」と言われるところから来ていた。

小学校の時の女の先生の体罰に悩んでいた時も、中学の時の体育教師の裸教育に悩んでいた時も、俺が誰かに相談することができていたら、俺は不登校になんかならなかつた。しかし、物心つく頃から、「男なんだから」「男のくせに」と言う言葉を毎日刷り込まれていた俺は、誰にも悩みを打ち明けることすらできず、結果として、高校に行ったのと同時に心が壊れたのだった。

母にはそのことは何十年にも渡って訴えてきていた。その俺に対して、母はまだこんなセリフを言うのだった。俺が怒ると、母は、「ごめんなさい。あなたがしつこいから、つい失言しちゃったのよ。私だって、あなたの悩みを何十年も付き合ってきたんだから」と訴えた。確かに悩みを聞くのは楽なことじゃない。しかし、「女のような」「女みたいだ」と言う台詞は女が男に向かって言うてはならない言葉なのである。極端なことを言えば、男に対して「男のくせに」なんていう言葉を口にする女は、セクハラなわけだから、もっと厳しい制裁をするべきだと俺は思っていた。実際、俺は冗談であってもそういうセリフをいう女性とは、ずっと縁を切ってきたのである。

このことがあったことで、俺はしばらく母と口

を聞かなかった。俺は「男のくせに」と言われたことで、感情的になって、母と縁を切ることを考えた。母の遺産なんていない、1人で貧しく生きていっても構わない、俺の苦しかったトラウマを理解してくれない女性とだけは俺はつきあいたくないのだ。

その翌日、福祉事務所に電話をかけた。俺は非常勤の身なので貯金だって少ない。1人ぐらいの食い扶持だったらどうにか稼げるだろうが、いつだって気に掛かっていたのはマンションの更新だった。もうすでに同じところに10年以上住んでいるのだが、2年おきにマンションの契約更新があり、その度に保証人の印鑑がいる。最初の頃は母に保証人になってもらっていたが、母が80歳を過ぎてからは弟に保証人を頼んでいる。

俺と弟は別に仲が悪いわけじゃない。ただ、きょうだいは他人の始まりである。もし、弟が印鑑をついてくれなくなったら、俺はマンションにいれなくなる。福祉の人に、そのことを相談すると、電話の女性は、「もし、どうしても保証人のハンコがいるけどないと言う場合は、保証人なしでも貸してくれるところを探るか、あるいは最初から保証会社と連携しているところを探すしかないと思いますね」と言われた。

もちろん、母や弟が俺を捨てるなんてことはありえない。弟は、仮に母が死んで、俺とさらに疎遠になったにしても、マンションの更新の印鑑ぐらいは押してくれるだろう。そのことがわかっても、俺はいつだって最悪のシナリオを想定してしまう。

そして、俺の女性に対する不信感はおそらく一生消えることはないのだ。

男子にだけ体罰を与える小学校時代の担任の女の先生、女子生徒から過酷ないじめを受けた中学時代、不登校でどこに行っても白眼視され続けた10代、女の子たちに悪口を言われ続けた大学時代、専門学校で教えた意地悪でタチの悪い女の子たち、8年前のジェンダーのことを何もわかっていなかった女性カウンセラーのことは今でもトラウマに

なっている。俺の人生は、いつだって理不尽な傷を女性から負わされる人生だったのだ。

女だって男から理不尽な傷を負わされた女はたくさんいる。しかし、女性の場合は少なくとも同情してもらえる。不当な扱いを受けたと訴えることだってできる。しかし、男が女に傷つけられたことを訴えたところで、男のくせにみっともないと言われるだけのことで、誰が同情するだろうか。もちろん、最近は徐々に男性も訴えられる社会にはなってきているが、少なくとも俺が活着ている間は、被害者の権力は女性のものなのである。

先日、行きつけのパスタのお店でその女性が、「私の知り合いのお母さんが娘を大学で下宿させるので、すごく心配なさっているんですよ。女の子だから、何かあったら困るから、バイトなんかはしなくていいとおっしゃっているんです」と話されていた。

今でもこういう親はいるのだろう。女の子だから、保護しなきゃいけない。しかし、実際には犯罪に巻き込まれたり、ヤクザやチンピラに絡まれて、暴力を振るわれたり、酷い目に遭わされる確率は男の方が遥かに高いということをご存知なのだろうか。

学校での体罰やいじめの問題もそうだが、男の方が過酷なことをされやすいのである。しかし、マスコミは女性被害は大きく扱うけれど、男性被害はほとんど扱おうとしない。小さな事件としてほうむられてしまう。女は弱者だから保護してあげるべき存在だけど、男は保護してあげる必要はない。男なんだから、自力で立ち直るくらいの男でなきゃ！という考えはまだ根強いのだ。

この状況はいつまで続くのだろう。少なくとも俺が活着ている間は、続いていくだろう。

5. 牧師の先生と話をする。

最近になって、死に対する恐怖は小康状態である。考えても仕方がない。人間だったらみんな平等に死ぬ。むしろ、死んだ後、神様にこの世の理不

尽を教えてもらいたいと俺は思っている。

先日、初めて教会の牧師先生に時間をつくってもらって、1時間ほど話をした。

話した内容は、これまでの俺のライフストーリーである。不登校を経て、大学から京都に来て、だけど、なかなか上手いかず、この年になって、キリスト教徒として安らかに余生を送りたいということ話をしたと思う。

まだジェンダーへのこだわりなどは詳しくは話していない。

むしろ、俺は社会運動などが肌に合わないのだということを中心に話した。大学がR大学で、下見もせず大学に入って、そこで学生運動に反発を感じていたこと。ジェンダーに関心があるから、社会運動にも参加したけど、結局大阪の運動家の人と京都の運動家の人、2回にわたって決裂してしまったこと。もう社会運動は自分に向いていないことがわかっているから、一生参加するつもりはないということ、できたらクリスチャンとして洗礼を受けたいけど、いつにしたらいいかわからないこと、などを話した。

「いつか洗礼を受けたいという気持ちになる時が来ますよ。その時に受ければいいんですよ」とその先生からは言われた。

そうなのだろう。そういう気持ちになる時を気長に待つのがいいと思った。

俺の悪いところはムキになって、そこに居場所をつくらうとするところだ。大学の時も、最初から憧れて入った大学ではないんだから、最初から醒めた気持ちで大学生活を送っていたら、ここまでわだかまりを残すことはなかっただろう。社会運動の時も、最初はあの人たちを庇って、あらん限り尽くしたことが、憎しみを増幅させる結果になってしまったのだ。最初から合わないことはわかっていたのに、いつまでも優柔不断にそこにいつこうとするところが俺の悪いところなのだ。尽くした分だけ、憎しみは大きくなる。つくづく、愛と憎しみは表裏一体なのだ。

教会もまだ通い始めて1年ぐらいである。少し

ずつ教会の参加者の人たちは親しくなっている。元々、そんな家族的な教会ではないので、ほどよい距離をおいて皆んなつきあっている。

これからもこのペースで続けて行って、ある日自然な形でそういう気持ちになった時に洗礼を受ければいいのだ。60歳近くにもなってくると、流石に気力や体力は落ちてくる。べったりしたつきあいよりも程よいのいいのだ。

6. 老いの身支度

11月〇日、かつての教え子と、つららというかき氷の店で話をする予定でいた。俺は、男子学生たちに付き合ってもらっている時が一番楽しいのだ。

ところが朝起きてみると彼からメッセージが来ていて、「今日は体調が悪いからキャンセルできないか」というのだ。「またかよ」と俺は思った。この子と限らず、若い学生たちは当日になってドタキャンしたり、自分から誘っという度々起きるのである。

振り返れば、俺だって若い頃はそうだったから仕方がない。「やれやれ」と俺は店にキャンセルの通知を入れて、その後、再び一眠りした。10時ごろになると突然ドアのピンポンが聞こえて目が覚めた。Amazonからの配達である。その前々日にキーボードを注文していて、それが届いたのだ。まさか朝に着くとは思わなかった。

その後、キーボードの開封は後回しにして、俺は1人でつららに向かった。1人だったら予約しなくても大丈夫な時間帯だった。1人で来ている人も何人かいて、男の人もいる。決して若い女の子だけのためのお店ではないようだ。柿のかき氷を食べた。美味しかったが、それにしてもおじいさんが1人でカウンターでかき氷というのも寂しいなあと思ったものだった。

家に帰って、キーボードを開いた。本当はピアノを買いたかったのだが、ピアノだと高い上に置き場所がない。聖歌隊の先生が1回2000円でレ

ッスンしてくれるというので、キーボードにしたのだ。

その先生によると88鍵盤くらいはあったほうがいいとのことで、それより小さいのは買わなかった。とは言っても、折りたたみできるやつなので、これだったら場所も取らないし、携帯もできる。これでしばらくは遊び相手ができると思った。

いつまでもかつての教え子に頼って、遊んでもらっているわけにもいかない。俺のFBを見ている先生たちは、「学生の面倒見がいいんだね」と言ってくれるのだが、実際には俺の方が学生に遊んでもらっているのだ。

だけど、もう1年で60歳。流石に60になって20代の子が遊んではくれないだろう。いや、くれるかな？どっちにしろ、これからは徐々に孤独になっていくのだから、一人遊びを覚えなきゃいけないのだ。

幸い、キーボードが手に入り、教えてくれる先生も見つかった。ピアノはボケ防止になるとも聞いている。もっと長く生きるといふ神様のお告げなのかも知れない。生きる楽しみがある間は、神様が俺に何かさせたいと思ってくれているからなのである。

老いの身支度を少しずつ始めながらも、生きる希望は常に持っていないでは！そう思うのだった。

7. 『窓辺にて』(今泉力哉監督・2022)

もう15年くらい前のことである。

当時通っていたスポーツクラブのプールで、ウォーキングなさっているおじいさんがいた。もう70代くらいの人だった。

そのおじいさん、「この間、うちの奥さんが死んでねー」と楽しそうに話されるのである。普通、連れ合いに先立たれた時に凹むのは女よりも男であると言われてきた。男は身の回りの世話を女に頼っているから、奥さんが死ぬとどうすることもできなくなる、一方で女はそもそも男がいなくても困らないから、むしろ亭主が死ぬと元気になる、

それは定説に近いものだったと思う。

しかし、このおじいさん、見事にステレオタイプから外れていた。俺は流石におかしくなってしまい、そのことを当時出入りしていたある社会運動家の人のグループの食事会で話した。

すると、「國友さんは、結婚していないから考えがナイーブなんだよ。奥さん、早くに死んでくれないかと思っている男なんて、一杯いるよ（笑）」と会の参加者の人たちからは異口同音に言われた。

その時は女性も混じっていたのだが、彼女も、「奥さんが死んだら、うるさく言われなくても済むし、第二の人生という雰囲気なんでしょう」と同意した。その時は他にも3人ほど参加者がいたのだが、俺以外は皆、奥さんが死んで嬉しい男なんて、当たり前なことという雰囲気だった。

結局、俺はステレオタイプに囚われていたのか。テレビのワイドショーの図式とはまったく違った世界が現実には存在しているのだ。

『窓辺にて』は今泉力哉監督の新作である。この人、よほど、そういう図式にとらわれない恋愛が好きみたいで、『愛がなんだ』(2019年)『mellow』(2020年)『his』(2020年)『街の上で』(2021年)『愛なのに』(2022年)『猫は逃げた』(2022年公開)とステレオタイプから外れた恋愛を描いていく人だ。

この映画では、妻が浮気をしていることを知っ
ていながら、そのことに何の怒りも感じない男を主人公にしている。しかも、彼は、そういう自分が変なんじゃないかと悩んで、周りに相談しているのだ。

別に悩むほどのことじゃない。ステレオタイプに囚われる時代は徐々に終わってきている。人間は、人間らしくさえばいい。男らしさ・女らしさにこだわるやつの方が、非人間的なのである。

俺は、この頃、そのことを断言して言えるようになった。しかし、ここに辿り着くまでには数えきれないくらいの確執と葛藤。

しかし、俺は間違っ
てはいなかった。確実に俺が思っていた方向に社会は動いている。

思えば俺の人生は10代<20代<30代<40代<50代だった。尻上がりの人生である。ということは、この後は50代<60代となるのだろうか。それを期待したいなあ。この頃は60代なんて、昔の60代とはわけが違うから、まだお爺さんと言うほどでもない。年齢のステレオタイプを気にすることも、これからは止めようと思う！笑